

# ブルークロス株式会社

～“ジャパニーズ・クオリティー”にこだわり救急用医療機器の一貫製造～

**救**急用医療機器の企画・設計、製造、販売事業を自社生産に誇りを持って展開。救命医療現場で活躍する人工蘇生器や吸引器、酸素吸入器、喘息治療の投薬などに使われるネブライザーに加え、災害時を想定した救急医療セットなどを提供している。“ジャパニーズ・クオリティー”にこだわり、部品に至るまで自社設計、製造する業態としては国内唯一の企業だ。



ブルークロス株式会社川越工場

**上**野晴夫社長が磁気治療器で著名な医療品メーカーから独立し、1981（昭和56）年に創業。会社員時代に培った医療機器販売のノウハウを生かし、災害用医療資材の企画、販売を始めた。1983年には、早くも海外向けに酸素吸入蘇生装置の販売に着手。取扱機器を増やすとともに、国内外に販路を拡大した。販売を専門に担う(株)ブルークロス・エマージェンシーを東京・文京区に設立した1985年からは、自社製品の開発と製造を本格化。同年、国産としては初めてオートクレーブ滅菌（熱消毒）のできるシリコン製人工蘇生器を開発し、製造を開始。電源を必要とせ

ず災害時や屋外などでも利用できる足踏み式吸引器や手動式吸引器の開発も実現して、企画、製造から販売までを一貫して展開する独自の業態を築くことにつながった。

**自**社による一貫生産で培った技術と企画力を生かし、1987年、酸素吸入器の開発に合わせて、酸素マスク、鼻孔から酸素を供給する酸素カニューラも並行して開発。翌1988年には、吸気状態に応じて酸素供給ができる国産初のデマンド式人工蘇生器を製品化するなど、相次ぐ独自開発機器の投入で事業を拡大。そ

の後も、救急救命器具をそろえた救急蘇生セット、救急医療セットの企画開発をはじめ、国産初ブラシレス DC モーター駆動の小型吸引器、医療施設用の壁掛け式や大型吸引器、ネブライザー、3電源吸引器の製品化と、2001年の川越工場完成を挟んで、使用する環境、用途に合わせた機器開発を進め、各種製品を充実させた。



人工蘇生器と関連部品

『大地震に備えた災害用医療機器の導入を東京都に働きかけたことがきっかけだった』と創業に至る経緯を語る上野社長。創業当時、地震災害対策が急務とされていた静岡県内を中心に、「医療救護班の結成や災害用医療機器の導入を地元の医師会、自治体に説いてもらった」という。以来、「種をまく」を信条とし、先見性を持って顧客の拡大に努めたほか、「夢を演出・実現、そのために工夫を生み出す企業文化、救急用医療機器の充実」を創業理念として、アイデア、企画力を駆使。品質管理に役立てるため、医療機器の設計、製造にかかわるISO認証取得にも努めてきた。



吸引器の製造工程

ラの鼻孔フィット性を高める三次元設計などに、安全性にとどまらず機能、操作、耐久性を追求してきた技術力が生かされている。海外に生産、営業拠点を構えず、代理店を通じて67か国と取引、シンガポールでは二度にわたって展示会を開いている。各製品には部品に至るまで社名を刻印、カタログやホームページではジャパニーズ・クオリティーと明記し、信頼にこたえる品質と自社製品への自信を表す象徴としている。

業界の現状について「価格を見れば、中国や韓国の企業に安価なものはあるが、命を預かる救急医療機器としての品質、独自性、革新性、創造性において自社製品が勝っている」と、メイド・イン・ジャパンではなく“ジャパニーズ・クオリティー”としての国産にこだわる理由を説明する。長時間の連続使用が可能な耐久性確保や省エネ設計、不意の停電にも対応できる3電源仕様、酸素カニュー

今年1月、生産、管理と経営のシステム強化を目指し「経営企画室」を新設した。最大の課題ともなる「原価企画による戦略を練り、新たな製品開発に力を注いでいきたい」と語る上野社長。毎年実施している社員研修などを通じて「人材育成」に努め、後継者づくりを進めるとともに、「採算性を高める経営環境を整えていきたい」と目標を語った。



上野 晴夫 社長

## 企業概要 ブルークロス株式会社

代表者 上野 晴夫  
 設立 1981年  
 資本金 2,500万円  
 従業員 パートを含めグループ合わせて45人  
 事業内容 蘇生器、吸引器、酸素吸入器、ネブライザー、救急医療セットの製造販売  
 本社営業部 東京都文京区本郷3-12-9  
 電話番号 03-3815-2220 FAX 03-3815-2229  
 川越工場 川越市かし野台2-22-4  
 電話番号 049-243-9939 FAX 049-243-9915  
 ホームページ <http://www.bluecross-e.co.jp/>  
 取引店 川越南支店